

「ひかり」発車直前、高架落下



線路

アメのように曲がり、浮き上
がった線路（阪神電鉄石屋
川車庫で、2月7日撮影）

JR新大阪駅で発車を目前に控えた四本の新幹線のドアが開き、約六十人の乗客が車内に入り始めた。一月十七日午前五時四十五分。単身赴任中の会社員前田幸彦（五）は北九州市の職場に戻るため、二十番線に停車していた博多行き「ひかり一三二号」（十二両編成）の十一号車へ。発車まで十五分。車内には十人ほどの乗客がいた。熱いせん茶を買おうと、ホームに出た。自動販売機に硬貨を入れた時、ホームが揺れた。自動販売機が倒れ、公衆電話が飛んだ。前田はH鋼の柱にしがみついた。

非常灯がともった。車体はまだ左右に動いている。ほかの三本の新幹線も同じだ。係員がマイクで、「二階に下りてください」。コンコースはホコリが充満、数百人がせき込み、ざわつく。「運行再開のメドが立ちません」。駅員が叫んでいた。

● 新大阪駅から西十五・六キロ。西宮市松籟荘の電器店「サグデンキ」二階で、経営者佐田知一（五）の妻さだこ（四）は床が持ち上がる感触で目覚めた。タンス、鏡台が両足、腰を直撃。もがいて抜け出すと、パジャマ姿のまま階下の店内へ下り、シャッターを開けた。

目の前の山陽新幹線の高架橋が、滑り台のような格好で阪急今津線の線路をふさいでいた。長さ三十一メートル、重さ

八百トンのコンクリートの塊。十五メートル上の架線や送電線が切れ、青や赤の稲妻が空中に飛び散る。無数のバラストがすべり落ちてくる。

ここだけではない。山陽新幹線の六甲トンネル東側を中心に八か所で、高架橋が落下。絶対にあつてはならないことが起きていた。地震発生がもう少し遅れ込んでいたら、「ひかり一三二号」は落下地点に突っ込んでいたはずだ。直接の人的被害はなかったが、この恐ろしい想定を忘れてはならない。

巨大な地震のエネルギーを地下で感じていた人もいた。

畝本忠則（四九）が運転する山陽電鉄の東二見発・阪急三宮行き特急（六両）は、乗り入れしている神戸高速鉄道東西線・大開駅を通過、プラットホームから九十メートル過ぎた。時速五十八キロ。床がバウンドし、ライトが消えた。百三十メートル走り停車した。すぐに非常用自家発電装置が作動。無線で指令本部の指示をあおいだ。

「地震だ。乗客を誘導せよ」。乗客三十人は無事。畝本は車掌早川邦彦（三）と大開駅への誘導を決めた。

ドアを開けて、乗客を降ろす。トンネル内にもかすかな非常灯。パニックは起こらなかった。一両目と二両目の計六つの車輪が脱線していた。懐中電灯を持った早川が乗客の先頭に立ち、畝本は最後に続いた。

大開駅へ着いた。上下線の間のコンクリート柱四十本は押しつぶされ、厚さ五